

RAKUGO
THE
FUTUREJAPANESE TRADITIONAL
ENTERTAINMENT

ラクゴ・ザ・フューチャー

第二十七回…真夏のミステリフェア

文…田中啓文

ミステリがブーだという。

まちがい。

ミステリがブームだという。

先日横浜で行われたSF大会の、とある企画で、あるところかミステリ代表になってしまった私は、さんざん生き恥を晒すこととなった。でも、これはしかたないことなのである。

私はミステリはほとんど読んでいない。というか、ミステリもほとんど読んでいない。SFも読んでいない。ホラーも読んでいない。では、何を読んでいるのかというと、そうですなあ、最近読むものというと、いわゆる脱力4コマというやつでしょうか。ほら、よくコンビニに置いてある「まんが

」というやつ。4コマ目を読んでも何がおもしろいのかさっぱりわからず、ぼーぜんとしてしまう、あの脱力感がたまらなのである。たとえば、おっちょこちょいのOLがいて、上司が彼女に、ファックスを送っておいてくれ、と頼む。

ところが、ファックスの調子がおかしい。上司や同僚のOLが言う。「ちゃんが使うと……ファックスまでが変」。

これで終わりである。私は、この4コマ目を読んで、これまででつちかかってきたマンガ、小説などの出来不出来の判断基準ががらがらと音をたてて崩壊するのを感じる。それが快感なのだ。もう小説なんか読まない。

などと言っていてはいかん。夏はミステリだという。私もミステリをいろいろ読んで、できれば書いてもみたい。だが、

本格系は無理なので、ハードボイルドならどうか、と、こないだ、生まれてはじめて、えーと……何だったっけ、レイモンド・チャンドラ・グプタ3世（つばさ怪獣）……とかいう作家の作品を読んでみた。伊藤某というヒットチャートメーカーがいて、アムロとかウタダとかマックスとかいろいろな歌手のヒットを手がけ、その独特のメロディーラインは

「伊藤式」と呼ばれて一世を風靡したが、そのうちにワンパターンのようになって飽きられてしまった。業界では、こういう言葉がはやったという。「さらば、伊藤式ヒットよ」。「いまいちですか。そうでしょうねえ。暑いので頭が回らんだ。

もう一冊読んだのは、有尾人のグループがあつて、全員が後ろを向いて立っている。皆、だらりと尾を垂らしているが、顔は見えない。ある女性に「あなたの彼はどの人ですか」とたずねると、即座に一人の若者を指さして言った。「長い尾は彼」。いまいちですか。そうでしょうねえ。暑いので頭が……あ、さつきも言った？ そうなんです。これもみんな暑さのせいなんです。こんな原稿なんか書いていないで、ミス터리でも読んでビール飲んで寝てしまおう。

というわけで、今回はミステリフェアを開催いたします。

大勢の患者を治療する忙しい日々疲れ果てた私は、その日の午後、久しぶりにベーカー街にあるわが親愛なるシャーロック・ホームズを訪ねた。安楽椅子に座った彼は、右手でバイオリンを弾き、左手でコカインを注射しながら、化学の実験をしていた。

「すっかりご無沙汰してしまっただが、あいかわらずのようだな、シャーロック」

「ああ、ワトサン。よくここに来る道を忘れなかったものだね」「皮肉を言っちなよ。ところで君の職業を当ててみせようか。

右手の袖に焦げたような跡がついている。これは四六時中アイロンをかけているクリーニング屋に特有の現象だ」「ぼくは昔からずっと医者だよ。忘れたのか」

「あ、ああ、そうだったっけ」

「患者がひっきりなしに来てね、心も体もくたくたになったんで、君の顔でも見たら少しは元気が出るかと思ったんだ。この袖は、家内がアイロンを掛けるときにちょっと焦がしただけさ」

彼は不快そうな表情になり、

「医者ならちゃんと消毒液の匂いのする上着を着てほしいね。それならすぐに当たったんだ。洗濯したての服なんかを着てくるから……」

ぶつぶつ言う彼に私はくびをかしげた。

「どうしたんだ。君にも似合わないな。どうしてそうご機嫌斜めなんだね」

「この暑さのせいさ。ロンドンは三十九年ぶりの猛暑だそうさ。精神の働きが鈍るし、もの見え方までおかしくなってくるよ」

「そんなに暑いかな……」

「君は鈍感だねえ。ほら、この文章は横書きのはずなのに、暑さのせいで縦に見えるじゃないか」

「う、これは暑さのせいなのか。ぼくは、本当に縦書きになったのかと……」

「幻覚さ、幻覚。人間の精神なんて弱いものだねえ。暑さや寒さといった外的要因にこれほど侵食を受けるなんて情けない限りだよ」

「ところで、君のほうはどうなんだ。商売繁盛してるのか」「見ればわかるだろう。この不景気で探偵なんか金を払おつなんでやつはほとんどいないんだ。ハドソンさんに払う下宿代に

もことかくありさまでね、そろそろテムズ川に身投げでもしようかと考えていたところね」

「そうだろうな。ここの不況が続くと、探偵とか落語家とかSF作家はたいへんだろう」

「ワトサン、探偵はわかるが、どうして落語家とSF作家を例に出すんだ」

「今回は落語もSFも出てこないから、ちょっと出しておうと思ってるね。ガイナックスへの愛想さ。横浜でイタメシをおいっってもらったからね」

「そんな愛想をしても、誰も喜ばないと思うがね」

「気は心さ。だけど、シャーロック、君の興味をひくような事件が起きているじゃないか。どうして乗り出さないんだい」

「例のバラバラ殺人事件だろう。エミとかいう日系人のバラバラに切断された死体の一部があちこちで発見されたという……」

「そうさ、君の偉大な直感を発揮するにはもってこいの事件じゃないか」

「だめだよ。誰もぼくに解決を依頼してこない。依頼がなければただ働きだからね」

「そりゃそうだ。しかし、そんなに暇なら、さぞかし毎日退屈だろう」

「そうなんだ。来る日も来る日もバイオリンを弾くかコカインを打つか化学の実験をするか……それにも飽きてしまったんで、今日はいっぺんにやってみようと思っただとところに君が入ってきたってわけさ」

「さっきから……何だか変な臭いがするんだけど……」

「ああ、化学の実験でね、亜硫酸ガスというのを作ってみようと思っただと、やっているとこころだよ」

「お、おいおい、亜硫酸ガスは毒性があるんじゃないのか！」

私は口と鼻をハンケチで押さえた。

「いいじゃないか、毒だろつがなんだろつが。こんな退屈な世界は滅びてしまったほうがいい。日本列島を亜硫酸列島にしてやる」

「じほじほ……そ、それはいい洒落だけど……じほじほ……ここは日本じゃなくてロンドンのはず……じほ……じゃなかったのか」

「あ、そうだったな。すっかり自分の役を忘れていたよ。それだけ役に没頭しきっているというところかな」

「じほ……何を言ってるのか……じほじほじほ……さっぱりわからないね。とにかくその実験は中止してくれ」

「しかたないなあ。まあ、他ならぬワトサンの頼みだから……」

彼は白煙の噴き出ししている試験管をゴミ箱に捨てると、再び安楽椅子にどざりと座った。

「ぼくだけじゃない。世界中の名探偵や優秀な警察官たちが困っているよ。不景気だ、仕事がないってね。レストレイド警部も引退して、今ではスコットランドで小さな民宿を営んでいるよ」

「それじゃあ、レストレイド警部がスコットランドヤードを辞めてスコットランド宿をはじめたっていう噂は本当だったのか」

「ああ。結構繁盛しているらしい。この前、るるぶに紹介されていたぜ」

「あのねえ、何度も言うつよつだけど、じほは日本じゃないんだ。どじほしてロンドンにるるぶがあるんだ」

「夏目漱石という青年が持ってきてくれたんだ。今、日本から留学に来ていてね」

「ふーん、あっそじほ」

「そう言つなよ。日本という国は馬鹿にできないぜ。君は、我々を想像してくれた偉大なミステリ作家であるコナン・ドイルが実は日本人であるということを知っていたかね」

「コナン・ドイルが？ そそそんな馬鹿な」

「そう思つたらどう？ ところが本当なんだ。彼は作家になる前は落語家だったんだ。芸名は桂小南といつてね、東京で上方落語をする貴重な存在だ。そのとき培った話術が、彼の小説のストーリー作りに生かされていることはまちがいない。ホームズ物の最後にある謎の解明シーンは、落語のオチから来ているという説もあるんだよ」

「馬鹿馬鹿しい。ドイルはイギリス人だよ」

「では君にたずねるが、高名なミステリ作家のほとんどが、実際には、国籍を誤って伝えられているということを君は気づいているかね。たとえばアガサ・クリステイだが、彼女たちも日本人なんだよ」

「彼女たち？」

「知らなかったのか。アガサは、エラリー・クイーンと同じように、二人の女性の合作ペンネームなんだ。そして、偶然だが彼女たちもドイルと同じく、落語家出身だ。屋号は、一人は明石家でもう一人は栗須亭だったかな。ポアロの造形におけるユーモア感覚は、落語から来ていたんだねえ」

「明石家栗須亭……？」

「ただ、エラリー・クイーンは日本人じゃない。アメリカ人だ」

「そんなことは君に言われなくても知ってるよ。岡嶋二人のように、フレッド・ダネイとマンフレッド・リーという二人の男性の合作だ」

「わかってないねえ、君は。エラリー・クイーンは女性、それもたった一人なんだぜ」

「はあ……?」

「君は、あれほどの有名人を知らないのか。彼女の夫は合衆国大統領なんだぜ!」

「……………」

「だが、その大統領も妻には頭があがらない。大統領を一国のキングだとすると、その妻は女王だろ。ヒラリー・クイーンというのは米国大衆がつけた彼女のあだ名だよ」

「あのねえ、ヒラリーじゃなくて、エラリーなんだけど」

「アメリカの下町のほうでは、ヒとエの発音が区別しにくいんだ。ぼくの長年にわたる発音学研究の成果さ」

「ほんとかねえ……………」

「夫のほうも、副業があつて、実はミュージシャンなんだ」

「あ、それは聞いたことがある。クリントンは晩餐会でサククスを吹いたりするんだよな」

「サククスなんか吹かないさ。だってプログレバンドだぜ。」

「彼のバンド名を知ってるか? ヒラリー・クイーンに対抗して、キング・クリントンっていうんだ」

「それは、キング・クリムゾン……………おいおい、話が横道にそれているぞ」

「ルパンの生みの親、モーリス・ルブランはどうなんだ」

「ああ、毛利氏ね。彼も日本人だ。スペースシャトルに乗って宇宙に行ったあと、農業をしてるよ」

「バン・ダインは?」

「彼も日本人。昔、吉本にいたけどね、今はどこでどうしているのやら。ええもん、たっかいのは当たり前……………」

「それはバン・ダイゴだろ。今ので笑った人はたぶん一人もいないだろう」

「失敬なことを言つなよ、ワトサン。ぼくはまじめだぜ。これは作家ではなく、作中人物だが、G・K・チェスタートン

の創造した、丸顔で小柄なブラウン神父という探偵がいるだろう。彼の国籍はどこか知っているかい」

「君こそ失敬だな。ぼくはチェスタートンのファンなんだぜ。ブラウン神父はわがイギリス国民だろう」

「それは大きなまちがいだよ。彼はアメリカ人だ」

「そんなはずはない！ 『ブラウン神父の不信』では、神父はアメリカに渡るんだが、アメリカ人を辛辣に批判しているぜ」
 「君は先日なくなった偉大なマンガ家、チャールズ・M・シユルツを知っているだろう。彼が創造した有名なキャラクターを言ってみたまえ」

「スヌーピーとチャーリー・ブラウンだろう」

「そう。そのチャーリー・ブラウンこそブラウン神父の幼い日の姿なんだ。小柄で丸顔……まさに瓜二つだ」

「根拠はそれだけかい」

「ぼくのような偉大な探偵になると直観が外れることはほとんどないのさ。ちなみに、チャーリー・ブラウンとは茶色いブラウンがなまったもので、つまりブラウン・ブラウンということになる。シユルツは、彼がブラウン神父であることを強調しているんだ」

「ちがうと思っただけだな……君の説でいくと、加藤茶も実はブラウン神父、ということになりはしないか」

「そう！ そのとおりだ、よくわかったね。まさに、加藤茶もブラウン神父なんだ。ぼくは、最近、『実はブラウン神父』である人物を世界中から探し出して、一堂に会する、という運動をはじめたんだ。ブラウン運動というんだけどね」

「そろそろ読者がついてきてないんじゃないかな。休憩したほうがいい」

「じゃあ、そろそろしよっ」

(休憩)

「休憩をはさんだら、ますます誰もいなくなっちゃったよ
うだな」

「ここまで来たら、ほっとくしかないさ、ワトサン。誰も読
んでいなくても勝手にやるだけさ。ところで、ここまでの話
でミステリ作家の国籍はまちがっているという説は納得いた
だけたかな」

「いや……まあ……その……」

「じゃあ、これを聞いたら誰でも納得する、というのを最後
に挙げておこう。我孫子武丸の国籍はどこだと思っかね」

「さ、さあ……日本人……なんだろう？」

「ちがう。彼はガイジンだ。その証拠に髪の毛が金色だ」

「あ、なるほど。そうかもしれないな。うん、今までの話が
全て腑に落ちたよ」

「君ならわかってくれると思っていたよ、ワトサン」

「ところで我孫子武丸の、人形シリーズが、講談社から今、
発売中の『メフィスト』に載っているようだね」

「うん、あれは面白いからぜひ読まなくては。そういえば、
同じ号に田中啓文の中編『鬼と呼ばれた男』も載っているら
しいな」

「君、まさか、我孫子武丸をだしにして、自分の小説の宣伝
を……」

「そそそそそそんなことをするはずがないじゃないか」
「声が裏返ってるぜ」

「最近、ヨーデルを練習してるんだ」

「しかし、田中啓文も売れないねえ」

「そうだねえ」

「どうしてかねえ」

「さあねえ……ミステリブームだからぐちゃぐちゃのホラーとか駄洒落小説なんか書かずにミステリを書けばいいのに」「書きたくても書けないんじゃないかな」「でも、こないだのSF大会の企画では、ミステリ代表になってたぜ。あれは詐欺じゃないかな」

「ぼくもそう思う。彼はミステリなんか書いてないからね」「売れないねえ」

「しみじみ言うなよ。真剣になるじゃないか」

「長編を書くのが遅すぎるんじゃないかな」

「デイクスン・カーみたいに、ばんばん書きまくったらいいのに」

「デイクスン・カーか。彼は文字通り、スンカーを惜しんで書きまくってたからねえ」

「E・S・ガードナーも多作だったな」

「ああ、あのフリーメイソンとかいう弁護士が世界の闇を牛耳っているとかいうシリーズね。あれはミステリというよりトンデモだよ」

そう言うつと、彼は大きく伸びをして、

「あああ……何かぼくの灰色の脳細胞を刺激するような知的な事件はおきないものかねえ」

「不穏なことを言うものじゃないよ。だいいち灰色の脳細胞はポアロじゃないか」

「ぼくの脳細胞だって灰色だよ、たぶん。……おおっ！」

「どうした、シャーロック！」

「みたまえ、ワトサン」

彼は窓から外を指さした。そこには、一人の若い警官がこの下宿のほうに歩いてくる姿があった。

「彼は依頼人だ」

「そんなことがわかるのか」

「ああ。まちがいない。あの急ぎ足。普通、警官なら、誰か

に尾行されているんじゃないかと、時々後ろを振り返るのが癖になっているものだが、彼はそれさえ忘れてまっすぐにここを目指している。まさにシャーロック・ホームズの庇護を求めているのだ。こうしてはいられない」

「何をするんだい」

「部屋を片づけるのさ。ぼやぼやしてないで君も手伝ってくれ。下宿費が払えるかどうかの瀬戸際なんだ」

ほどなく、ハドソンさんの案内で、今見た若い警官が部屋に入ってきた。

「あの……私は……」

「ようこそいらっしやいました。まあ、おかけなさい。あなたがぼくの依頼人であることはわかっています」

「はあ……実は……」

「まあ、落ち着いて。あなたは、クリーニング屋ですね」

「え？ ちがいます。ぼくは……」

「みなまで言いなさんな。その証拠に右の袖が焦げたようになっていきます。これはあなたがクリーニング屋である証拠です」

「ぼくは独身で、アイロンがけを失敗したんです」

「ぼくはスコットランドヤードの刑事です。レストレイド警部がまだ在職中に何度かお会いしているはずですが」

シャーロックは惘然とした顔つきになった。

「実は、今、担当している事件がどうにも袋小路に入り込んでしまったので、ホームズさんのお知恵をお借りしたいと思つて参つたしだいです」

「ぼほう」

「その事件というのは……新聞などでもうお聞き及びでしょう。女性のバラバラ殺人事件です」

シャーロックのほうをちらつと見ると、内心の悦びを隠そうと必死の努力で顔を歪めている。

「そ、そうですね。しかし、バラバラ事件など珍しくも何ともないし、わざわざこの私が出馬する必要もないのではないかと思いますがねえ」

「マスコミにはまだ伏せてありますが、容疑者はもう捕まっているのです。コウベエ・ジョーンズ、あだ名を 正直コウベエ という男で、無類の馬鹿正直。嘘やまちがったことを口にしたことはただの一度もない、という評判の男です」

「それならすぐに自白するでしょう」

「ところが彼は容疑を否定しています。バラバラ事件の被害者は、頭部や両脚がまだ発見されていないので断定はできませんが、コウベエの婚約者のエミ・グレースという日系人ではないかと考えられています。エミは、しばらく前から失踪していて、行方がわからなくなっています。ところが、ここへ来て、エミは生きているのではないか、という可能性がでてきました」

「その根拠は？」

「この手紙です」

そう言つて、彼は手紙を私たちに見せた。

KOBEI・JONESさま

あなたにぴったりの素敵な音楽をお贈りします。

あなたが、このCDを気に入ることを祈っています。

愛を込めて。EMI。

年 月 日

「エミ・グレースは、音楽好きで、自分でもピアノを弾きまですし、コウベエと二人で一緒に何度もコンサートに行ったりしています。この手紙は、コウベエのところにおととい届けられたCDに添えられていたのです。日付はさきおとといの

ものです。この手紙が本物だとすると、このCDはエミから彼へのプレゼントであって、まだエミはどこかに生きていると考えられます。理由はよくわからないが、どこかに身を隠しているのだ、というわけです」

「なるほど」

「もう一つ。現場の状況から、殺人は、ちょうど今から一週間前に、チームズ川のほとりのA記念公園で行われたと考えられています。犯人は、そこで死体をバラバラにして、あちこちにそれを移動させたのです。ところが、その当時、「ウベエにはアリバイがあるのです」

「どのようなアリバイですか」

「彼は、A記念公園からかなり離れた場所にある、B公園にいた、と言っています。複数の目撃証言もあります」

「彼はなぜB公園にいたのですか」

「『噴水がきれいだと聞いたので、それを見るために足を運んだ』と言っています」

「ほぼつ。……で、A記念公園とB公園の間はどのくらいあるのですか」

「歩いたら3時間はかかるでしょう」

「ですが、歩いて歩けない距離ではありませんね。それではアリバイとはいえませんが」

「シャーロックはしばらく考えていたが、やがて顔を上げ、

「わかりましたよ」

と言った。

「え？ 何がわかったのです」

「事件の全貌が」

「まさか。こんな短時間で……」

「偉大な探偵にとっては、時間は無意味です」

「ですが、本当に……」

「くどいね、君も。犯人は 正直コウベエ です。彼がB公園に行ったのは事実でしょうが、その前にA記念公演で自分の婚約者のエミを殺して、バラバラにしたんです」

「どういこととは、彼は嘘をついているといことですね。嘘やまちがったことは絶対に言わないという評判の男なのですが」「彼は、事実を述べているのです。つまり……彼はA記念公演で婚約者エミの脚を切り取り、それをB公園まで運んだのです」「あ……」

「もうおわかりでしょう。彼が『B公園まで足を運んだ』と言ったはそのとおりの意味だったのです。おそらくB公園の噴水のまわりを掘れば、エミの脚が出てくるはずですよ」「すばらしいっ。おそれいりました。完ぺきな推理です。ですが……手紙の問題はどうなります。エミから来た手紙、あれは偽手紙ですか」

「ちがいます。彼は、あの手紙についても正直です。あれはCDについていた手紙ですよ。コウベエは、通信販売であるのCDを注文し、それが手元に届いた、というだけです。注文主の名前を手紙の文頭に掲げるのは当たり前でしょう」

「し、しかし、手紙の末尾には、エミの名前が……」

「あれはエミではありません。あのCDは……実は、東芝EMIの通販センターから届けられたものなのです！」「若い刑事は、一瞬、茫然自失の表情をしていたが、すぐに気を取り直し、

「偉大なホームズさんとお仕事できて光栄です。ありがとうございます。うございしましたっ……」

そう叫んで、部屋から飛び出していった。

「お、おい、探偵料は……」

シャーロックはそう怒鳴ったが、返ってくるのは風の音だけだった。

「そうがっかりするな、シャーロック。また、いいこともあるわ」
 私がそう言ってなくさめようとするよ、

「おためごかしはやめてくれ、パパ」

「お、おい、パパって……」

「もついい。読者もそろそろ気づいているだろう。何も隠す
 ことはない。そろそろ公にしてもいいころじゃないかな、ワ
 トサン、君がぼくの父親であることをね」

「……………」

「君が、セリフや地の文で、ホームズではなく、シャーロッ
 クという表記をずっと使っているのは、二人とも姓がホーム
 ズだからだ。ワトサン・ホームズ君」

「せっかく今までドイルが隠してきたというのに……」

「いや、ぼくがあかさなくても、いずれ誰かが気づくだろう。

ワトサンは、『私の父さん』の略であることにね」

「普通は、ワトソンとかワトスンと書くからね。新本格の読
 者にとっては、みえみえの叙述トリックだったかもしれない
 な、息子よ」

「おいおい、何を言ってるんだ、パパ。新本格の読者なんか
 がこんなエッセイを読んでいるはずがないだろう?」

「それもそうだ」

では、誰が読んでいるのかという疑問はさておき、本日こ
 れまで。